

本日は私たち修了生のためにこのような式典を用意していただき、誠にありがとうございます。また、ご多忙のところ、プログラム担当の先生方、専任教員の先生方、職員の皆様、ご来賓の皆様のご臨席を賜りましたこと、修了生一同深く御礼申し上げます。

修了にあたり、グローバル安全学トップリーダー育成プログラムで学んだ日々を振り返ってみると、視野を広げることができたということを強く感じます。自分の研究や専門との両立が難しいと感じる場面もありましたが、自分の専門とは異なる授業、C-Lab 研修、自主企画研修、インターンシップ、異なる分野の学生との交流等、研究室だけでは得られない貴重な学びと経験を得ることができたと思っています。

私は、ロボット工学を専攻してきましたが、この大学院での生活の中で、一つのジレンマを抱えていました。それは、「役に立つロボットを作っても研究にならないが、研究するだけでは役に立つロボットは作れない」ということです。おそらく、分野は違えど、多くのリーディング大学院生が、「研究」と「社会実装」あるいは「現実の世界」と「学術の世界」の間にギャップを感じ、似たような悩みを抱えていたのではないかと思います。私は、長い間、この研究と社会実装のどちらかに正解があるのではないかという感覚を持っていました。しかし、今は、どちらが欠けてもいけないと感じています。研究だけではただ知識が増えるだけです。一方で、今ある知識だけで問題を解決するのは限界があります。両方があって初めて世界を前に進め、より良い社会を築くことができるのです。これは、研究室での研究とリーディング大学院での実践的な活動を平行して進め、多様な環境や価値観に触れる機会があったからこそ得られた気づきではないかと思います。そして、それらを通して、現実の世界と学術の世界を俯瞰的に見て、研究と社会実装のサイクルを回すための下地を作ることができたのではないかと思います。

また、もちろん、この研究と社会実装は、自分一人で両方を回さなければならないものではありません。それぞれ興味や関心が異なり、能力も異なります。それらを明確にした上で、役割を分担し、協力することも重要な力です。このような多様な個性や能力が存在することをリーディング大学院で様々な分野の学生と関わる中で、身をもって知ることができ、分野を越えてそれらをつなぐためのリーダーシップをリーディング大学院の活動での成功と失敗の両方を通して、実践的に学ぶことができました。そして、必要とあれば協力を仰ぐことができる人脈もまたここで得ることができたのではないかと思います。

本日をもって我々は社会に出ていくわけですが、我々が向かう先は、変化の激しい時代の中です。その中で、常に最前線で変化に対応しながら、研究や社会実装、あるいはその両方をこなすには、我々はまだまだ経験不足であり、未熟です。社会人としての自覚と責任を持ちながらも、今後も努力を怠らず、一つ一つの問題に真摯に向き合って、現場での経験を積

み重ねて行きたいと思います。そして、本当の意味で、社会を牽引するトップリーダーとなるよう、リーディング大学院で得た学びや経験、人脈を基礎として、それぞれのフィールドで邁進いたします。

最後になりますが、貴重な学びの機会を与えてくださったプログラム担当の先生方、日々ご指導いただいた専任教員の先生方、我々の活動を支えてくださった職員の皆様、ともに学んだ学生諸子に心から深く御礼を申し上げますとともに、グローバル安全学ならびにリーディングプログラムの発展をお祈り申し上げ、修了生代表のあいさつとさせていただきます。

令和元年 9 月 26 日

グローバル安全学トップリーダー育成プログラム 修了生代表 谷島諒丞